

なんち屋より

伊予柑・ポンカン お届けします

うえはらゆうき

「農」という字は、田畑の土をやわらかくすること、かたい土をほぐしてぬるりとさせること という意味の字だそうです。こういう「農」の作業は、僕たちにはほとんどありません。

農業とは別に 果樹栽培という言い方もします。「栽」は植物のむだな枝葉をセカって（ほぐよく育てること、また植えることで、「培」は草木の根もとに土を乗せかけて育てること という意味とのこと。茫然自失、これこそ僕たちの仕事じゃないか。農民より、むしろ栽培民と名乗る方が正確なのでしょうか。実はときどき僕たちは農業をしているのだろうか と気を揉むことがあったのです 理由のひとつが分かった気がします。

木の様子を窺うと 新芽や枝葉のひとつひとつが ひとつの生命として全体性を有しているようで それでいて部分として確かに他と相互作用している。思いもよかぬ循環のめまぐるしさに 振り落とされそうな気分になります。そこへノコギリやハサミを当てるのは この木との一生の付き合いに及ぶような 緊張感があり 不安に思うこともあります。そうしたとき 伊予柑やポンカンの素直さか ありがたい。ちよっとへそ曲がりな温州みかん（それはそれで可愛げがあるというものです）とは 雰囲気がいちなり

ます。思った通りの反応がある嬉しい。時折見せてくれる 思った以上の反応を目の当たりにすると 何とも言えない熱いものを感じずにはいられません。

このころ これまでおこなってきた有機栽培に 準ずる方法よりも もっと植物の本来持っている力に沿った栽培ができるのではないかと考え 勉強しています。柑橘栽培は 苗木を植えてから 木が成熟するまで 数年かかり 植わっている成木でも その本来性を取り戻すまでしばらく時間がかかると思います。確信の持てるころから 徐々に取り組んでみたい。自分も、栽培をおこなっているのと 気づいたことが 大きな手掛かりになりそうです。

ところで 柑橘栽培にも様々な方法があります。それによって、同じ品種でも手の入れ方が違いますし 木の様相も異なるように感じます。食味や安全性といった指標から農産物が語られることがあり 農業者の側からは 経済性ということも重要ですが それは人間社会の都合であって どんな栽培方法であれ 農産物のひとつひとつは、それ自体は その環境に応じて一生懸命育ったのだと 僕自身は思います。そのことを考えてみて下さい。何かひっくり返ってしまうほどの 驚くような事実ではありませんか。